

大陸(中支)

軍隊生活 四年半の思い出

神奈川県 川島金 作

私は大正十(一九二二)年八月六日、神奈川県高座郡小出村下寺尾において、父福松、母ハルの八人兄弟の四男として、この世に生誕いたしました。

成長して小出村尋常小学校に学びましたが、小学校も六年生になりますと、多くの級友は農家の手伝いに出され、また商店などに奉公に出されました。私は高等科に進み、卒業と同時に夜間の青年学校に入り、そこでは一通りの軍事教育を受け、習得に努めました。このことが、後の軍隊入隊後

に大変役立つことになりました。やがて徴兵検査を受けましたところ第一乙種合格となりました。

昭和十七(一九四二)年一月十日、横須賀不入斗いりやますにありました重砲兵連隊に入隊し、軍人としての基本教育や砲の取り扱いなど砲兵としての訓練教育を猛烈に鍛え込まれました。こうして三カ月が過ぎますと、どういう訳か四月から六月まで衛生兵教育を受けることになりました。

今度は病院で戦傷者の看護や介抱、あるいは外科手術の手伝いなどで、看護婦さんなどからも気合を入れられ、動き回りました。そのころには横須賀軍港などに軍艦が入るたびに、簣すでぐるぐる巻かれた重傷者がロープでつり下ろされ、病院に運ばれてきました。

こうして看護や外科の教育の最中、今度は歯科教育のために歯科医の下で歯の治療の教育を受け、実際に治療にも当たり歯科技術を習得しました。

ちようど、そのころ、米軍機による東京初空襲に遭いましたが、低空で飛来した米軍機の操縦者の顔が見えるほどでした。この空襲では米軍機による爆弾投下はなく、写真撮影が目的のようので、米軍機は横須賀軍港、同要塞地帯の情報収集が目的のようでした。当時、この横須賀付近の一角は日本人でも許可なく立ち入ることはできない地域でした。このため、上空には防衛のため迎え撃つ我が方の高射砲の破裂音や爆煙が空一面に展開されておりました。

(米軍機の東京初空襲は昭和十七年四月十八日。米B25爆撃機十六機による、いわゆるドーリットル空襲がありました。東京、川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸などが空襲を受けました。この空襲は米空母「ホーネット」より飛来し、本格的爆撃というより、日本の主要都市の情報収集と日

本人に対する心理的効果を狙ったものでした。)

私は、入隊後丸一年を経過しましたが上等兵に進級できませんでした。その後、外地要員となり、川崎市溝の口に昭和十八年五月に集結しました。ここで部隊編成が終わりますと有蓋貨車に詰め込まれ西下しましたが、降車した場所も、到着した港も、どこであったか、今もって記憶に全く分かりません。

それでも上陸地は朝鮮の釜山港で、ここから汽車で中国の蕪湖へ行きました。ここでは度々の敵襲があり、特に鉄路の破壊などが中心でしたので、主に鉄道沿線の警備につきました。この鉄道警備は北支から中支にわたり約十カ月間の警備に当たりました。

また当時、この鉄道で運ばれてくる貨車には石炭や種々の物資が積み込まれてきており、中には内地向けの物資もあり、鉄路の警備は重要な任務でした。

その中で、私は当時進行していた重慶作戦のた

め白砂州の第二船舶兵の渡河地点の警備に当たりました。この辺では毒ガス作戦も行われていましたので、空気よりも重いガスを吸引する危険がありますので、少しでも高所に駐屯しながら、警備はもちろん中国地方人の宣撫工作にも重点を置き勤務しました。

この辺りの地方人には病人や障害者が多くいましたので、私は医療の知識と看護技量を持っていたため、これらの施療、治療にもフルに活躍しました。これも宣撫工作の一つで、このためこの地方人の人々からは大変慕われることになりました。

そのころ、敵も電波兵器を用い、我が軍の火砲を狙い、次第に攻撃力を増加してきました。初めのうち敵の砲撃は我々の頭上を高く通り過ぎてゆきましたが、次第に狙いを低く定め、照準を絞り、我が火砲陣地にも正確に打ち込んでくるようになりました。

このため近くで戦友の一人が被弾して倒れました。私たちの部隊は、各地や各隊からの集められ

た編成隊であるため、倒れた戦友はどこかの地方の出身者か、もちろん、名前も分かりませんでした。

このような経緯もあって、ようやく第二船舶部に戻り、今度は初年兵受領や食料、弾薬、薬品などの物資の受領、運搬の任務に、約二十人の部隊で釜山を往来しました。戦地において、昭和十九年九月十五日になって、ああこの日は故郷の国幣神社、寒川神社の例大祭の日だということを思い出していました。この例大祭では有名な浜降祭があり、大きないくつかの神輿が練り出される様を、なぜか頭に浮かんでまいりました。

二十日ごろです。洞庭湖まで我が軍艦も遡上して行くことが出来ますが、その先は水深も浅く、小船での輸送でなければだめです。そのため物資の積み替えを行って、奥地への輸送を行うわけですが、その輸送船を狙って米軍機が攻撃を仕掛けてきます。

特に岳州付近ですが相当の被害を受けました。次々に爆弾投下を受け、さらに機銃掃射もされま

した。あるときは、近くに古寺を見つけて、その鉄扉を楯として身の安全を計ったこともありました。

当時は、夜間には大分冷えてきますので、付近の民家などから古材をはがして暖を取ることもありました。何しろ食料不足のため、夜間のうちに近くの落花生畑から落花生を集めて食料としました。また近くの竹林で豚を捕らえて食べましたが、脂肪が多く、皆激しい下痢をしました。

昭和二十年八月十五日の終戦以降は、道路工事や木製橋梁の修理や補修などの使役に狩り出されました。しかし兵隊たちの大部分は、疲労が激しくて病気になるがちでした。

昭和二十一年三月、ようやく上海に集結し、帰還の船を待ちわびました。六月五日、京都府舞鶴港に上陸することが出来ました。

そこには大きな日本の地図がおかれており、各所（都市など）に赤く塗られた箇所があり、これは空襲などで焼失したことを示してありました。

戦友の中には自分の帰る場所が焼失したことを知り、男泣きに泣く姿も見受けられました。

帰還後、私は地元の「くろがね自動車（現日産）」「日東タイヤ」などで守衛を勤め、その後は寒川町役場で定年を迎え、今日まで年金生活を送っております。

野戦では度々危険な目に遭いましたが、いつも寒川神社が身辺を守ってくださっていたと、今も敬神の心を捧げております。